
当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

AA 研共共課題「身体性の人類学：ものの人類的研究（4）」

2022 年度第 2 回研究会（通算第 2 回目）

日時：2022 年 11 月 20 日（日）14:00-17:45

場所：オンライン会議室

プログラム

14:00-15:45 山本芳美(都留文科大学)「道具から考察する沖縄のハジチ」

16:00-17:45 奥野克巳(立教大学)「生と身体、人類学の 20 世紀～ブラニスラウ、クロード、ティム～」

概要：2022 年 11 月 20 日（日）に今年度第 2 回の研究会を実施した。

当日は AA 研の共同研究員である都留文科大学の山本芳美氏、立教大学の奥野克巳氏の 2 名の報告者によってそれぞれ上記表題の通り研究報告と参加者全員による質疑応答が実施された。それぞれの報告と質疑の概要は以下の通りである。

報告 1：「道具から考察する沖縄のハジチ」山本芳美（都留文科大学/AA 研共同研究員）

今回の発表は、奄美大島・喜界島以南の島々で 120 年ほど前まで女性たちにおこなわれていたイレズミ（ハジチ・針突）について、道具や技法を通して考察した。本発表は、2021 年 5 月から 2022 年 3 月まで実施した沖縄・東京・アメリカの博物館資料や県内教育委員会が所蔵する 90 年代半ばまでのハジチ調査票の確認調査で得た資料、沖縄本島中部で 12 月と 3 月に実施した彫師沖縄初代彫信氏への聞き書き、2022 年 9 月に訪問した台湾パイワン民族の彫師 Cudjuy Patjidres 氏の工房で得た情報に基づいている。

発表者は 90 年代初頭より 98 年頃まで、沖縄各島においてハジチの法的規制とその影響についての調査をおこなった経験がある。修士論文と数本の論文を書いたのち、台湾の留学を経て、しばらくハジチの研究からは遠ざかっていたが、2019 年 10 月の沖縄県立博物館における企画展「沖縄のハジチ、台湾原住民族のタトゥー 歴史と今」展の監修により、道具とその使用という角度から研究と考察を再びこころみるようになった。

90 年代までの沖縄県の各教育委員会と博物館などで展開された調査ほかにおいては、道具が確認されてこなかった。2021 年 5 月に、アメリカ・ペンシルベニア大学附属博物館に

て 1896 年に名瀬と那覇で William Furness によって収集された施術道具の情報が確認できた。次いで、1885 年に収集された東京国立博物館所蔵の道具とハジチを描いた額の情報も得ることができた。

この 2 か所の道具と、1930 年代に実施された小原一夫と三宅宗悦による調査、写真資料などをもとに、沖縄中部で開業する沖縄初代彫信氏に道具の復元と技法の再現をしてもらった。ちなみに、沖縄初代彫信氏は、沖縄で最も古く開業した和彫りの彫師であり、70 年代後半に大阪で 2 年間修行した経験がある人物である。

沖縄周辺の技法としては、台湾原住民族、フィリピン・ミンダナオ島の北部民族などがおこなうオーストロネシア共通のハンドタッピング、奄美・沖縄とアイヌ以外の日本でおこなわれている和彫りがあり、アイヌ女性が手と顔にほどこしていたシヌイエでは小刀による施術がおこなわれていた。発表では、2022 年 9 月に撮影した台湾のパイワン民族の彫師 Cudjuy Patjidres による人類学者である蔡政良氏への施術映像と、日本の和彫りの施術技法を対照させ、その道具や技法がハジチとは大きく異なるものであることを確認した。その上で、ハジチに用いられた道具の構造や使用方法についてのポイントを整理した。

今後の課題としては、アメリカの各アーカイブにある資料、今年 11 月に沖縄県公文書館に寄贈された小原一夫氏の卒業論文原本などの確認などが挙げられる。アーカイブがデジタル化されて公開されることが続いており、今後もハジチについての資料が発見される可能性が大いにあることを指摘して、結論とした。

発表後の質疑応答では、参加者から、「技術と伝承に関する機密がどのように意識されているのか」、「技術に関する「機密」自体のあり方」、「機密の再現性と身体性との関係」などについて質問があり、発表者により靴づくりと職人のあり方なども対比させた具体的な事例に基づいた応答がなされた。

報告 2: 「生と身体、人類学の 20 世紀～ブランイスラウ、クロード、ティム～」奥野克巳（立教大学/AA 研共同研究員）

発表者は、本共同研究会の「多様な身体的実践や表現を対象に、行為者を取り巻く多様な＜もの＞や環境等との動的な連関の相において研究を進める」という趣旨に即して、今後、どのように個人研究を行っていけばいいのかという問題関心を持って口頭発表を行った。身体あるいは身体性の次元を個別的な民族誌において取り上げるだけではなく、そこに、20 世紀の人類学が取り組んできた「生」というテーマを加えながら検討していくと実り多いのではないかという想定のもと、どのような研究展望が開かれうるのかを探ることが、今発表の目的とされた。

生をめぐる 20 世紀の人類学の流れを押さえるために俎上に載せられたのが、ブランイスラウ・マリノフスキ、クロード・レヴィ=ストロース、ティム・インゴルドという 3 人の人類

学者であった。ただマリノフスキとレヴィ＝ストロースについては、時間の関係で割愛せざるを得ず、インゴルドを中心に発表を行った。インゴルドの研究者としての学問形成、理論考察の射程や問題意識と研究＝実践への展開などを順に追いながら、人間の生を主題とするインゴルドの人類学について概観した。

1970年代初頭にフィンランド北東部のスコルト・サーミでフィールドワークを行なったインゴルドは、人間は、自然的な存在であると同時に社会的な存在でもあるという点から思索を始めている。その後、人間を「生物社会的存在」とした上で、生きる世界の流れの中に人間を位置づけた上で、人間の生を人類学の中心的な課題としながら研究生活を推し進めていった。

その後、生きているとは、行き先の決まった目的論的なプロセスなどではなくて、行き先が常に更新され、宙に投げ出される、流転するプロセスとして捉え直さなければならないのではないかと、インゴルドは捉えるようになっていく。インゴルドにとって、生とは、人とモノ、人と環境が絶えず流動しながら生成、持続、瓦解する中を切り拓くことによって、開かれていくプロセスなのである。

インゴルドは、人類学を、生を生け捕りにする研究＝実践だと捉える学問であると理解する。その点を踏まえて、世界に耳を澄まし、学ぶことから、未来に向かって生きていく方法を探し出すことを提唱する、とても肯定的な意味合いの文化人類学を切り拓いていったのである。

発表者からは、こうした「生の創成」のプロセスに目を向けるインゴルドを土台として、どのように身体表現や身体技法という本研究会の主題を扱おうのかという課題意識を持ちながら、今後は身体性の人類学にあたるべきではないかという指摘がなされた。

発表後のディスカッションでは、生物学的な存在でありかつ社会的な存在である人間をめぐるインゴルドが定立した「相補命題」や、その後の「生物文化的存在」というタームをめぐる質疑応答が行われた。

次に、インゴルドが築き上げつつある彼の独特の人類学の評価をめぐる意見が交わされた。また、ギブソニアン的な枠組みから出発しながら、人間と環境の相互作用を生々流動的な流動へと転じたインゴルドの環境認識の持つ課題、アリストテレスの「質料形相論」に対するインゴルドの解釈の正当性などに関しても、活発な意見・情報交換がなされた。さらに、「動詞」的状态を強調するインゴルドを踏まえて、日本語での「生きていること」という「動名詞」的な理解・翻訳では不十分であり、“Being Alive”を「生きている」としななければならないのではないかと、そしてその点を踏まえて、本研究会のテーマである身体性の問題が捉え直されなければならないのではないかと示唆がなされた。

(以上終わり。)